

五月も中旬を迎え青々とした竹林を風が揺らすさわやかな季節になってきました。

竹にまつわる禅のお話として有名なのは、「きようげんぎやくちく香 巖 撃 竹」という きようげんちかん香 巖 智 閑 禅 師 が 悟 る 場面の話でしょう。

香巖智閑禅師は、唐の時代の中国の方です。大変に聡明で修行中からたくさんのお経や仏教書を理解していました。

あるとき師匠である いさんれいゆう 瀧山 霊祐 禅師 から 「父と母が生まれる前にあたって、自分の言葉を示してみなさい」と問われます。しかしどんなに考えてもいくら書物を読んでも、納得する答えが見つかりません。ついに長年集めていた書物を全て焼き払い、答えを考えることをやめて、修行僧たちに食事を振る舞う役割をひたすらに務めるようになりました。

年月が過ぎ、どうしても答えが知りたい香巖は、瀧山禅師に答えを教えてもらおうと願い出ます。しかし「答えるのは簡単だがそれではおまえのためにはならず、答えてしまったら後に私を恨むことになるだろう」と答えを教えてはくれませんでした。香巖は答えを探すことをあきらめ、曾て、高名な禅僧が住んでいた山に小さな庵を結び、そこに竹を植えてひっそりと修行の日々を送りました。

あるとき、いつものように路の掃き掃除をしていると、 ほうき 箒 が小石を飛ばして生えていた竹にあたりました。竹に小石があたった音が静寂の中に響きわたり、その音を聞いて香巖はハッと悟ることになるのです。

その後も香巖禅師は生涯その山を離れずひたすらに仏道修行を続け、後世に名を残すまでになりました。

香巖禅師のお悟りがどのようなものだったのか想像することは、とても難しいのですが、竹に小石があたった音によって、どうしてもわからなかった「父と母が生まれる前にあたっての、

## 『 禅のこころ -曹洞宗- 』

---

自分の言葉」に気づくことができたのでしょう。

その音は、掃き掃除をする自分と箒と小石と竹とが関わり合って生まれたものでした。自分自身を含む全てはさまざまな関わり合いの中で互いに支え合っています、父と母が生まれる前からずっとその支え合いは続いてきたのです。見えないけれども確かに大切な繋がりを、小石が竹にあたったその音から感じとったのかもしれませんが。

竹は地上では一本一本別々に見えますが、地下茎によって繋がっています。数十年に一度花を咲かせると、その繋がっている一山の竹が枯れてしまうそうです。見えないけれども確かな繋がりが、そこにはあるのです。

— 終 —